

## 蝟螂鯨鐵道

泉鏡花作

一

持主もちぬしなりし人の名ななるべし。裏うらにならべて稍斜やうななめに、  
H、H、H、と三字書さんじかいたり。幾度いくたびか繰返くりかへして愛讀あいどく  
せる其眼そのめには觸ふれたりけむ。假綴かりとぢの繼絲つなぎいとぎれ斷々／＼にな  
りて、表紙へうしは纒わすかに其一部そのいちぶを殘のこして、辛からうじて着つきた  
るのみ。

手荒てあらく取扱とりあつかひしものにはあらず、持主もちぬしの鄭重ていちようなる、  
西洋紙せいやうしの薄うすき表紙へうしに、厚あつき西にしの内うち以もて兩面りやうめんに蔽おほひかけ  
たるが、持古もちふるしたればならむ、煤すすけて薄黒うすくろくなりた  
り。

エツキス  
と題だいしたる此小説このせうせつの題字だいじをば、其蔽そのおほひの紙かみを  
すかして、原もとの書體しよたいに違たがはざるやう、上うへより袋字ふくろじに  
寫うつし取りて、おなじくエツキス書かきて、また其上そのうへに金きん  
の箔彩はくさいりつ。下したに小ちひさく（完まつたく）とぞ記しるしたる。

著者、秀蘭、畠山 須賀子は、掌に乗せて  
つく／＼と見たりしが、顔をあげて、山科の家の  
内室と眼を合せぬ。

二

山科の主婦は身體瘦せたり。瞳清しく、客に向ひ  
て、ものいひいづる聲沈みぬ。

「お須賀さん、御覽の通り、何のお愛想もなし、  
お構ひ申すことも出来ませんが、貴女、其が何より  
でせう。大層大事にして持つて居たと見えますね。  
風説も聞いて居ますが、私も拜見して面白う思ひま  
した。めつきり旨くなつたのね。」

お須賀は少しく顔を赧らめ、

「も、お恥かしいんですよ。あなたの前ぢやあ冷  
汗が出ますもの。可いもわるいも何うせ學校に居ま

した時分は、あなたにお作文を直して戴いたんですものね。御覽で、恐入ります。其上、あの、何うも濟みません、つい何だものですから、貴女お怒り遊ばしはしまいかと思つて、もう小さくなつて參つたんです。」

「いゝえ、結構。私のことを忘れない、でまあ、よく書いて下さいました。しかしお須賀さん。」  
此聲力籠りたれば、客なる女作家は俯向きたり。

「長屋も長屋、こんな邊鄙な處の、路地の奥で、御覽の通り八疊一室で、貴女には、見えも外聞もござんせぬが、火鉢一ツ無いでせう。ま、手桶も不自由といふので、お客様にお茶をあげますにも、この口の缺けた土瓶を持つて、私が井戸端へ行つて、大きな釣瓶から小さな口へあけるので、溢して、まあ、だらしのない。裾も何もびつしよりになつて、それをば着換へるものもありませんから、この體で、濕つぱい、かび臭い、疊に坐つて、氣味の悪い、踵を浮かしてさ、そしてあなたとお話をする。ね、この口でいつちや、をかしうござんすが、ま、貴女御存じ

だから言ふやうなものゝ、そりや私は書も読みました、字も習ひました、人形の首ならば繪も書きます、佛蘭西語も眞似ならばしますが、其が何の役に立ちますもんですか。つまりいへば、貴女は、些とはものも知つてる女が、土方や何ぞの妻になつちやあ、氣の毒だ、可哀相だ、つまらないと、いふやうにお思ひなすつて、可ござんすか。それで、この、  
エツキス  
もお書きなすつたやいなものですけれど、其はね、お机に對つて、空な家政學でも讀んでる時の考へですよ。

かうなつてはね、せめて長屋なみのおかみさんづきあひでも出来る方が、いくら可いか知れませんか。毎朝御飯を焚くてツちやあ、良人のに手傳をして貰ふやうでは、ほんとに仕方がないんですもの。衣物だつて、たちおろしの絹ものばかり手に懸けてゝも、つぎはぎが出来ないぢやあ困るんですよ、お須賀さん。

甲斐性のないことゝいつたら、良人にもぼろをさげさしときや、我身でも釘裂をひつぱつて、何んな

に見つとも無いか分りません。

書が讀めたつて、お客様の名刺一ツ讀まうでなし、字が書けたつて、あなた、二年にも、三年にも、お朋達の處へ年頭状一枚書いて出せないやうな身になつては、何にもなりやしないんですから、私や却つて良人のに恥かしくつて、氣の毒でなりません。力がありや荷車の後押でもしますがね。働がありや内職でもして、お菜だけなりと稼ぎ出したら、良人も何んなに都合が可いか知れませんが、何うでせう。不規則な食物を頂けば胃が悪くなる、元結でも扱らうと思へば、れうまちに障りますね、寒けりや、寒いで、風邪は引くんだし、氣候が悪ければ腦がいけないツて、いつたやうな、こんな、厄雜な、病身な、甲斐性なしの、なまけものを、土方の内に置いて何うなりませう。ほんだうに氣の毒でなりません。其に悪い顔一ツ見せないで、優しくして、可愛がつてくれますもの。土方だつて、何だつて、私にや過ぎものゝ良人ですよ。

あんな學問なんかしなかつたら、些少は氣樂に暮

せませうのに、なまじつかの其それが邪魔じゃまになつて、時々ときどきは堪たまらなく、キ、キと胸むねへ何なんだか込こ上げるの。なりたけもう忘れてしまひたいと思おもつてね、傍そばにや紙かみの片きれも置おかないやうにして居ゐるもんですから、此節このせつではね、それでもやう／＼もう餘程よつほど何か忘わすれてしまつて、お須賀すさん、見みたつて、あなた一寸見みたつて分わかるでせう。大分鈍だいぶんどんなものになりましたよ。」

女作家ぢよさくかは悄然せうぜんとして俯向うつむきたるまゝものいはず。

主婦あるじは音の調ていじうの變かはれるにもかゝはらず、さりげなう装すそばへり。

「ですから、あんなことも出来できたものです。あなた、弟御をとうとこさま様が何かおつしやりはしませんか。いゝえね、何も他ほかではないんですが、此間このあひだ、古本屋ふるほんやの店みせでああなたの弟御おとうとこさま様に、このエツキスを戴いたいた時ときですよ。夜分やぶんぢや、ありましたけれども、つい、何なんなの、お須賀すさん、焼芋やきいもを買かひに入はいつたんです。小兒こどもを負おぶつてさ、この書ほんを片手かたてに持もつてね、可いいぢやあゝりませんか。おほゝ、何なにも私わたしは知しらないで居ゐましたけれど、お聞きき申まをしますやうでは、弟御おとうとこさま様さまが見みて

在らつしやつたかも知れませんのね、ちつと恥かし  
いやうです。まだ娑婆ツ氣が取れません。」  
と淋しき笑顔したりき。淋しき笑顔なりき。原よ  
り愛嬌には乏しき人の、眉はりゝしげなれど、口は  
しまりたれど、色はいと白けれど、氣高くは見ゆれ  
ども、太くやつれたる人の笑顔ぞ淋しかりける。

三

「實に濟みませんでした。も、何うしたら可うご  
ざいませう。私ともう些と分別がございますと、斯  
うして、今日だつて然うなんです、參られたわけぢ  
やあござんせんけれど、つい、あの弟がね、富  
坂上の古本屋だとかいひましたつけ、この書を見つ

けまして、斯う言ふ風に讀んであつたもんですから、  
何うでせう、私に一ツ喜ばせようと思つて買った時  
に、丁どまた、貴女が行らして、店へお立ち遊ば  
したんですとね。あの兒も、些ともあなたを存じち  
やあ居ませんでございましたでせ、うけれど、  
といふ小説はツて、あなたがおつしやつたのを、聞  
きましたさうで、おや、と立留まりましたさうでし  
た。

さうすると、斯う、あちこち御覽遊ばしながら、  
さつき行きがけに、一寸見て置いたんだが、此店に、  
キス　　といふ小説本があつたつけ。ちつと借りたいが、  
何うしたんだえ？　と、ま、失禮ながら打明けて申  
しませう。なりにはお似合ひ遊ばさない、しつかり  
したお言だし、お人品もお人品なり、其に彼の兒も  
姉の書いた小説　　といふんですか、まあ、  
其ことをお聞き遊ばしたもんですから、何うも黙つ  
て居られなかつたさうで、差出て、買ったのをお貸  
し申しましたさうですが、つい、お所もつかゞはな  
いで、其ツ切。あの、何ですよ。えゝ、其も、其お  
買物を遊ばしたのも、お見受け申して居ましたさう

ですが、無暗と喜んで歸つて來ましてね、そして其話をしますから、ふと其何でしたの。お姿なり、お言つきなり、何うも、あなたでおあんなさるやうに察れましたので、もしやと思つて古本屋で、あと、四五日後でしたツけか、弟に聞かせましたら、あゝ、ちよい／＼本をお借り遊ばす、あの方ならばツて、いつてきかした、お名前が、貴女でせう。

直ぐ出懸けまして、お宅を伺つたら、つい二三日前こツちの新井の方へお引越し遊ばしたつて、さういふもんですから、お目には懸りたし、お詫も申したし、始終ね、恚う申しては何ですけれど、あゝ、學校では山科さんといふと上下響いたものなのに、あんなにおなんなすつてから、何う遊ばして在らつしやるだらう、とね、なかの悪かつた、つまらない方が、皆、馬車やら、人力やらで、やれ、花、それ、月とおもしろく世中を送つて居るのを見ます度にね、私は口惜くツて堪りませんで、何の詰らない。束ね髪の前垂がけで構ふものか。山科さんを引張り出して、日本橋の上へ立たしたら、小さくなつて河岸の軒下を通らうのにと、さう思はない日といつちやあ

なかつたもんですから、つい、あんないたづら書も  
しました譯だし、お目にかゝつたら、またお机に縋  
りついて、詩集のお談でも伺はうと、實はね、あな  
た思ひこんで居ましたが。」

言ひかけて、ぞつと見て、

「大層貴女かはりましたねえ。」

あるじは膝を正したり。須賀子も襟を搔合せつ。

「汽車を下りると、田圃道で、最う方角も何も分  
りませんので、道を聞いてお顔を見ると、其が貴女  
だつたのには吃驚しました。お小さいのを抱きな  
すつて、草履穿で、地藏様の前にお立ち遊ばして在  
らつしやつた、あの、お姿にはほんたうに泣きまし  
た。私、ぼんやりしてしまひました。」

けれども唯今のお話を承りますと、申しや  
うのない思召で、さういふ貴女のお心では、あなた  
が、何ぞ不平なやうなお言でもありませんたら、却つ  
てお宥め申しませんければなりませんやうになりま  
したね。

そりや、お兩親はおいでぢやあなし、お小さい時  
分から、伯父さんにお育てられなさいます、其御親  
類のお計らひで、唯今の旦那様に、何もおつしやら  
ずにおかたづき遊ばしたが、全く伯父さんだつて、  
こんなことに成らうとは思し召さないで、ま、其時  
分は立派にお暮しなすつた方へ、お世話なさいまし  
たわけですから、其をお怨みなさいますと言ふわけ  
にはゆかず、一旦おかたづきなすつた上は、旦那様  
のことですもの。譬へ何んな落目におなり遊ばさう  
と、兎や角、あなたがおつしやるわけのものではな  
し、そりや何處までもお従ひ遊ばさなければなりま  
せん。つまりあなたのお身體を旦那様のものとして、  
そしてまあ、かうやつて、お暮し遊ばして在らつし  
やれば、なるほど、學問を遊ばしたのが、お邪魔に  
なるでございませう。源氏をお聞き遊ばしたのも、  
英文をお綴り遊ばすことも、書のお見事なものも、佛  
蘭西のお出来なさいますのも、何んなにか、お邪魔  
になるでせう。

あなた。」

あるじは顔の色かはりぬ。唇をばふるはせつゝ、  
「はい、邪魔になつて、邪魔になつて、邪魔にな

つて、邪魔で、邪魔で、私や何だつて、つまらない、  
學校へなんぞ行つたんでせう。邪魔で、邪魔でしや  
うがありません。」  
言ふ、／＼其眉動いたり。

#### 四

「しかし、此様でもありません。」  
主婦は俯向きて 傍を見向きたり。色白くうつ  
くしき男の兒の、太く痩せたるが疲れし状にて、あ  
をむけに枕して臥したる、色褪せし茜 木綿の枕か  
けに、鼠の齒形つきて、蕎麥の殻は溢れ出でつ。

寐ねたる兒は、氣高き臉を心ばかり動かしながら、  
幽に鼾をぞ立てたりける。

ぢつと下眼に見ながら、

「學校へ参つたのが邪魔になるツたつて、書籍を讀んだのが妨害になりますたつて、此兒ほどぢやありません。こんな面倒ツ臭いものはないんです。」

と聲をふるはして、主婦はまたも息をつきぬ。

須賀子の暖かなる右の腕は、ソと枕の下より、寐ねたる兒の項をからめり。

「御道理です、貴女、そりや御道理ぢやありません。御勝手に御自分のなすつた學問を邪魔に遊ばすやうに、このお兒様を邪魔になすつちやあ不可ません。この、まあ、お色の白い、華奢な、御發明さうな、可愛い、お顔つたらない。御覽なさいましな。野原で董でも摘んで、あちこちみまはしておいでの處の、夢でも見て在らつしやるんだよ、屹と。あれ、睡つておいでの眼の中が、動きま

ずぢやあございませんか。」

と頬ずりしていふ。主婦は口許を弛めせで、「食物でも搜してる夢なんでせう。それがまた動かないやうになれば、お須賀さん、もう活きぢやあ

居ないんですもの。何も眼を動かして居たからたつて、變つたことはありません。」

「まあ、そんな理窟ぽいことはおよしなさいまし。可愛らしいに、理窟も何もありませんわね、貴女、もうお幾歳におんななさいますの、お三歳？」

「いゝえ、五歳です。養が不十分な故でせう、毎月些とづゝ小さくなります。」

といひかけて眼をしはたゝけり。須賀子はわざと心には留めざる状しつ。

「それが矢張可愛くつて在らつしやるんですよ。可いぢやありませんか。掌中の珠つていひますもの。でく／＼したのは削りかいて、石垣にでもするが可ござんす、ねえ。」と兒の耳に口をつけしが、恚くして呼ぶべき、其幼兒の名を知らざりき。

「何と然うおつしやるの。お名は、あの何とおつしやるの。」

主婦は投出したる口氣にて、

「そんな兒に名なんぞが要りますものか、詰りま

せん！」

「何をおつしやるんですよ。」

「いゝえ、それでもね、生れた時には良人と二人で、木の性だから、あゝだの、水の性だからかうだのつて、源平藤橘なんか引張合つてつけたんですがね、今ぢや氣恥かしくつていけません。」

「飛んだことばかりおつしやいますのね、ま、あなたは何んな御出世を遊ばさうも知れませんが、萬々一にも此のまゝで暮し遊ばすにした處で、お身體に備はつたお位を、そつくりこのお兒様にお譲り遊ばしたのと思つて在らつしやれば可いぢやありませんかね。きつと御出世を遊ばすわ。このお顔つきを御覽なさいな。卿とでも、何とでもお名のりなすつたつて可いぢやありませんかね、眞個に何とおつしやるんですよ。」

わづかに笑ひて、

「しんこつていふんです。しんこー新粉ツ

て言ふんです。」

「新粉ツて妙ですね。」

「その位なもんでせう。」

須賀子は膝を寄せたり。二人は顔を見合せぬ。

「そんなお名ツてのがあるもんですか。」

「いゝえ。」

## 五

「それでもはじめの内は世間普通で、人様にお交際の出来るやうな名をつけて置いたんです。」

主婦は手近なる硯箱引寄せつ。蓋は盆にかへて、小さき皿に煎餅装りたるを乗せて先刻須賀子に與へ

たり。硯の中少しばかり濡れたりしに筆をつけて、  
掌に、信行の二字をば見事に書いて見する。

「お須賀さん、これを訓にしてつけておいたの。」

「おや、信さん、信行様ですか。可い名なこと。」

「それ御覧なさい。ですから今ぢや、氣恥かしく  
ツて、人様の前ぢや信行ツていへませんから、無暗  
に信行、新粉ツて恚ういふんです、困りますよ、お  
巡査さんが戸籍を檢においでの時、一々名を讀み立  
てられるには。ほんとに、新粉にしてしまへばいゝ。  
いづれ、両親の玩弄物になつて、後で日が経てば、  
干かちびて、うつちやられる位なもんです、お須賀  
さん。」

と凜として、聲に力を籠めてぞいひたる。

須賀子はめまじろぎもせで聞きたりしが、急に身を投げて、幼児の腹に、ふつくりと襲着せる、衣柔かなる胸をあてゝ、両手に犇と抱きつゝ、膝にのせてかゝへ起せば、うつとりと眼をあきながら、なほ人顔をわきまへで、其まゝおしあてたる兒の頭に、須賀子は頬をつけながら、怨むが如く、

「不可ませんよ。不可ませんよ。もう、そんなことおつしやる方に、此兒を預けちや置かれません。何うして、この坊ちゃんを、あなたに持たして置かれますものか。危い！」

「え。」

「危険ですわ、ほんたうにと咳きつゝ、面を正して屹となりぬ。」

「あなた。」

「はい。」

「このお兒を、私に下さいませんか。」

「あの、信行を。」

「え、私に下さいまし。何卒私に下さいましな。兒を持つたことはございませんが、育て方は教はりました。貴女、學校の先生は、宛然違つたことばかりは教へますまい、屹とお育て申ます。立派に大人にして見せますから、思ひ切つて預けて下さい。」

主婦はまた須賀子の顔を瞻りたり。

「しかし、其は私一人の兒ぢやありませんもの。」

「旦那様には何とでも可いやうにおつしやいましな。遣したとでも、忘れたとでも。あらたまつて申したら、そりや、何てツたつて、お一人子を、他人手にかけてようとはおつしやいますまいから、其處はあなたが計らつて、何とでもいゝやうにして、何うぞ私に預けて下さい。ね、あなた、可いでせう。」

主婦は言はざりき。

「可いでせうね、いけないたつて、何うしてもお連れ申しますよ！」

「學校の氣でいらつしやる。」

と珍しくもいとにぎやかに笑ひたる、渠は眞とは  
せざりしなり。

須賀子は色を正して、

「串戯ではありません、あなた。」

一際聲を沈めつゝ、

「あなたに持たして置きますとね、坊ちゃんの身  
が案じられます。しまひにや殺さずには置きますま  
い！」

主婦は蒼くなりぬ。

戸外の門慌しく引きあけて、裾をば端折りたる瘦  
脛長く、ひよこ／＼と身を浮かして、ものゝ忍びや  
かに、然れど息忙しく、走り入りたるは家の主人な  
り。其瞳定まらで、うろ／＼とニす眼に、女性の  
客も見えざりけむ、身を繕はむともせで妻の傍  
に踞ひつ。助けを求むる如き弱き聲にて、

「お品、あゝ吃驚した／＼。」

「何う遊ばしたの。」

極めて何氣なき状したれど、眼の色はたゞならず。

今女作家に看破されし胸の内の、見え透くとや惟ふらむ。

良人は唯どぎまぎする。

「あゝ、あゝ、お品、憲兵さんが来た。」

「何をおつしやいます。」

「何てツて、お前、来たよ、憲兵さんが来たよ。」

憲兵さんが来たんだよ。」

「憲兵さんが何ういたしました。」

「うむにやさ、憲兵さんがの、今日な、ぼてふりの角がお前。河岸のこぼれだつて、見事な奴を一尾持つて居たらう。見ると、旨さうでハヤ蟲唾が走つて堪らんぢや。處で、五百出して大い奴の、これだけあらうといふのを買ひ込んで、一番うむと御馳走にならうと思つて、まだ仕事中ぢやつたが、一度中歸をして、宅へ置いて出直さうと思つて、踏切の此方まで来ると、あゝ、吃驚せまいことか。むかうから年の若い、顔の緊つた、一見識あらうといふ、立派な憲兵さんが、お馬で、ずい、とやつてござる。あわをくツて半被の下へかくしたけれど、例のが、

のはうずに大いと来て居るので、ぬうと尾のさきが見えくさる。はツと思つた、と、むかうでも眼を着けた、南無三ぢや。御法度は承知なり、お前もさういつたつけが、憲兵さんはきびしいで、巡査のやうなものではなうて、恐しく取ツちめると知つてたで、堪らぬわ。其まゝ地面へうつちやつて遁げて来たが、何うもな、あとをつけて来たやうで落着かれぬ。一廉、とがめられずには濟むまいかの、の、お品。

とて屈託顔する、笑止なり。恚るものを、冷かに笑ひ棄てむとも妻はせで、

「何です、あなた、何をおうつちやりなすつたの。」

「えゝ、御法度の例物よ。それ、くはぬたはけに食ふたはけといふ。」

「お魚？」

「やれ分りのわるい、鰻ぢや。」

「まあ、何うも。」

と、微笑みたり。須賀子は、人の兒を抱きたるまゝ、身を開きて、片寄りつ。此方より差出でゝ、

われを名告らむともなさざりき。

「坊にも食はさうものを、可惜ことをした。まあ、  
身體中がなまぐさい。」

と袖を開きて香を嗅ぎしが、眉根を寄せてぞ仰向  
きたる。やがて其細き眼に、フト女作家を認めたり。  
認めあへず、けたましく、

「や、お姫様。何處の？」

とばかり、おど／＼して額づきぬ。

七

主人は見も知らざる眩き婦人の、目前に居たるに  
心また打騒ぎて、いよ／＼落着かざる状の、なほき  
よと／＼と、後見らるゝ顔色にて、手を揉み腰を浮

かしながら、戸の方を顧みたるが、再び顛倒して色を失しぬ。

「や、や、だから其れいはぬことか。アレ見えた、さあ大變ぢや。お品拜む、助けると思つて、うまく言譯をしておくれ。俺も此處には居られぬ。あなたも何卒、何卒お言葉お添へなされて、穩便に、穩便に、出るぞ、頼む。」

といひあへず、室の中を立つてまはりて、打つかるやう裏口より田圃へ抜けて駈け出せり。二人は顔を見合せつ。齊しく戸外に眼を注げば、手綱を控へて入居たり。軒よりも高きあたり、近衛士官の制服なる緋の洋袴の片足の豊に鞍にぞ跨りたる、女作家は見て微笑みぬ。

「あれ、旦那様はまあ彼の兒を、憲兵とお間違へなすつたんですよ、お品さん、弟です、」

「それぢや、あの、」  
「はい、エツキスをさしあげました弟ですわ。」

女作家はいひかけて、信行を抱きたるまゝ、裳を  
捌き、するりと立ちて、端近に立出で、

「千代さん　ー　千代さん。」

「えゝ。」と答へ、馬上よりすかし見て、

「おや、姉様、此處に。」

といふより、佩劍の柄持添へて、ひらりと馬より  
おり立ちぬ。

「今ね、おもしろい男がさ、僕を見て、あの踏切  
へ鰻をうちやつて駆出したから、妙なことをすると  
思つて、あとをつけて來たんですが、姉様、何誰  
の。」

「はあ、お品さんのお宅なの。一寸御挨拶申すが  
可い、貴女、千代太郎です。」

少年士官は轡を取つて、歩武を進め、框の外に一  
揖して、

「其後は。」

「久時でございました。」

恚りし時、この品子の、其眉秀で、其鼻隆く、其

口しまり、其眼涼しく、全幅の風采をあげて、一個  
また單に貧家の妻にてはあらざりき。

須賀子は何をか捌かむ状にて、

「千代さん、お前散歩かい。」

「は、雑司ヶ谷の方から新井へまはつて來ました、  
日曜で、お天気ですから。」

「まあ、よくね、いゝ處で出逢つたよ。些少おあ  
がりでないか。お邪魔をさしてお頂きな。」

「何うぞ。さあ、」

「いえ、大きな荷物がありますから。いづれ、」

少年士官は打笑しが、轡の音して、鱗爪の響いと  
高く聞えたり。

座を立ちし時、目覺まし居たる稚きものゝ、優し  
き腕に手を縫りて、人見知もせで莞爾やかなりしが、  
大なる動物の氣勢するに、ふと其頭をあげたるが、  
士官の乗馬を眼ばやく見て、

「お馬、お馬。」

背返りして、須賀子の腕に伸びあがり、愉快らし  
く指さしいふ。

「おほ、お馬、お馬。坊ちゃん、お好き、アノお好きなですか。」

「まるで夢中です。」

「勇ましいことね。千代さん、ちつとお抱き申して乗せておあげだとい。」

「結構、さあ入らつしやい。」

「泣かせちやあ、嫌よ。」

と片足土間に下りざまに、須賀子は弟の手に、信行を渡すとて、ソと目配しつ。

「遠くへ行かないでさ。」

品子は端然として見たるのみ。

「恐入ります。」

「どれ。」

と抱き取り、其まゝひらりと土官は騎しつ。立ちもやらざる品子の顔をぢつと見て面を背け、笑顔の頬をば稚兒の、頤にあてゝ俯向きつゝ、肅として伊みしが、鞭あてむとせず、おのづから馬にまかせて打つたりける。

「お須賀さん。」

いま座に歸れる須賀子の手を、主婦は突然固く握り、年上のおのが膝に引寄するが如くにし、色をかへて身を震はせしが、何思ひけむ笑出しぬ。

「ほゝゝ、あなたは鰻をあがりますか。」

と握りたる手に力を籠むる、突如としたる舉動に、さすがの作家も氣を奪はれ、呆れて、眼をニりて、眞顔に主婦を瞻るのみ。

「あがるんですか、あの、鰻といふものを、え？」

「いゝえ。」と内端に答へたり。

品子は頷き、

「あがりません、然うでせう。けれども、そりや貴女お一人だからさ、いまに御婚禮をなさいますと、さうすると、屹と鰻をおあがりですよ。」

「何うですか。」

女作家は茫然たり。あるじは膝の上に、おさへたる年下の女の手を、また強く推着けながら、

「何うですかツてもね、お須賀さん、こゝに毒があります、可ござんすか。恐しい、恐しい、毒なも

のがある、言つたやうな譯ですよ。見るも嫌、食べたら生命にでも障りはせぬかと悚毛が立つと、して置くんですよ、解りましたか。

すると、自分の旦那が其を食べて、何うせ中毒つて死ぬものなら一所ぢやあないか。毒にあたる分には誰だつておなじことだのに、夫婦のなかで、一人が食べるものを、一人が食べないといふことはない。

トさあ、こんなことに成つたら何うします、お須賀さん、お須賀さん。」

須賀子はわつと泣き出しぬ。しつかと其肩搔抱きて、

「もう一度、あなたと打毬がして遊びたいね。」

と言ひかけてはら／＼と落涙せり。

「あれ彼處に。」

と見やりたる、一叢薄の薄き雲、白き穂の茂れる  
なかに、黒き駒見え、緋のツボン、輝く劍も見えす  
きたり。

駒のたてがみ風に纏れて、颯と靡いたる薄の上に、  
近衛士官の帽あらはれ、波のまに／＼打つ如く、廣  
野の末を一直線に行きつ戻りつしたりしが、立停り  
て、やゝある間に、須賀子は走り近づきつ。

と見れば、榛の樹の低き枝に、蟪蛄の一ツ居つ。  
少年士官は一本の薄を抜き取り、蟲が傾くる斧をつゝ  
きて、龍車に向ふ其怒りの、もの／＼しく可笑きを、  
抱きたる稚兒に指し示して、賺し、且つ慰めたるな  
り。

姉は見るより莞爾として、

「よくおもりが出来るのね。」

「一度泣きかゝつて困つたよ。そしてもう歸るん

かね。」

「はあ、あの品子さんは踏切の信號をね、内職にして居るんだツて、ちやうど時間だから停車場へ行きながら送つて下さるツて、私はこれに乗つて牛込見附まで行くつもりだから。そしてとう／＼このお兒を貰つたよ、ほんたうに私や泣いたよ、可哀相ツちやあない。鰻まで食べさせられりや澤山だわ。」

「何うしたんです。」

「まあ、歸つてゆつくり話さうね。さあ、坊ちゃんを此方へおよこし、高い處で、また蟲でも起しちや不可ません。」

「で、貰つて、直ぐ連れて歸られますか。」

「あゝ、然うとも。」

「そりや可ござんした。」

姉の抱き取りたる信行をば、馬上より打視め、  
「眼を御覽なさい、姉様、母様の兒です。僕も可愛がりますせう。」

「あゝ、然うしておくれ、嬉しいこと。」

顧みれば、品子の、縞柄も分らぬまで着古したる  
素裕の裾は切れて、海松の如く、もつれて、垂れて、  
砂にまみるゝに、彼の稜骨を包みつゝ、穿き切らし  
たる冷飯草履に、身をまかし棄てゝぞ歩し來る。帯  
も細紵のまゝなれば、正しき衣紋も亂れて見ゆ、肩  
のあたりもいた／＼し、あはれ、其まゝ野に臥しな  
ば、小町の髑髏となんぬべく、目ざましきまで衰へ  
たり。

心軽く須賀子は立寄り、

「ぢやあ、母様、わざと、最う参りますよ、可  
ござんすか。」

頷くを見るや、否や、稚兒を引しめて、はたくと  
走り過ぎ、線路の橋を渡り越して、停車場に駈け入  
りしが、直ちに待合所に出來れり。溝を隔てゝ眼の  
前に、品子は信號旗の捲いたるを力なく携へつゝ、  
立木の幹に背を倚たして、あらぬ方をば打視遣りぬ。

汽車來れり。

凄じき響とゝもに、信行の、須賀子が膝より蹴ね

下りぬ。不意の物音に驚きけむ。

「母ちゃん／＼。」

と呼はりあへず、帯の結目ひら／＼と、可愛き足の踵を見せてむかひ側なる母をあてに、アレヨといふまに走り出で、線路の石壇に早や下りたり。蒼くなりて須賀子は飛び着き、危ふく抱いて取る時疾し、流るゝ如く走りし汽車の一ゆりゆつて留りぬ。

同時に須賀子は吻と呼吸して、人の見る目の晴がましきも思はず、高く頭の上に稚兒をツと差上げた時、品子の手なる信號旗の青きがひらりと翻りつ。地響して汽車留まりしトタン、無量の思を籠めたる眼に、彼方に背く品子の顔を、つく／＼と打まもる。時に、信行の危かりし手に汗握れる少年士官は、ハツとわれに返りし状にて、衣兜なる時計を探り、カチと蓋あけて俯向き見たるが、手にせる薄を其まゝに、一あてあてゝ穂の波を浮いつ沈みつ行過ぎたり。

汽車また動きぬ。須賀子と稚兒を乗せ去りたるな

り。

秋あきの日はやくすづきて、遠近をちこちの森は暗くらなりぬ。  
淋さびしき野末のすゑに青あをき旗はたの絞しぼりたるを提ひっかげつゝ、寂せきしとし  
てイたみたるたき品しなこ子が冷ひやかなる眼めの注そげるは、十町じゅうちやう  
一いち列れつに穂ほの揃そろへる薄すゝの穂ほと相あひ並ならびて、東西とうざいに走はしりて  
雲くもに入る、二筋ふたすぢ長ながき線路せんろの上うへに、鰻うぐの引裂ひっさかれし其それ  
なりき。

【完】

## 鏡花花鏡の藏書

『鏡花花鏡』

http://www.geocities.  
co.jp/Bookend/7025

『鏡の花』

http://web-box.jp/s  
chultz/